

トゥキュディデスの長文について

柳 沼 重 剛

1

これまでたびたび述べよたりに、そして誰もが認めているように、トゥキュディデスの文章は読みにくい。そしてその読みにくさの原因の、最大ではないが、少なくとも一つが、文が長いということにあるということも、誰もが信じていることである。どれぐらい長い文があるか、長い順に文の番付を作ってみると次のようになる。ただし、「演説」は除外し、もっぱら記述の文のみを対象とする。

表①

| | | | | | |
|---------------|------|----------------|------|------------------|------|
| 1. V 16. 1. | 160語 | 7. VI 45. 1-2. | 127語 | 13. I 133. | 116語 |
| 2. VII 99. | 141語 | 8. V 17. 2. | 123語 | 14. II 84. 3. | 112語 |
| 3. VI 100. 1. | 137語 | 9. IV 55. 1-2. | 121語 | 15. VII 39. 1-2. | 105語 |
| 4. VII 69. 2. | 137語 | 10. I 9. 2. | 120語 | 16. I 132. 5. | 104語 |
| 5. VI 31. 3. | 129語 | 11. II 13. 1. | 119語 | 17. VI 47. | 103語 |
| 6. VI 43. | 128語 | 12. VI 60. 2. | 117語 | 18. VII 90. 1. | 102語 |

これは100語以上から成る文を列挙したものだが、トゥキュディデスは行為や事件を記述するのに、ふつう何語ぐらいから成る文を書いているかという点、次の通りである。

表②

| | 文 数 | 語 数 | 平 均 |
|-----|-------|---------|-------|
| I | 597 | 14,719 | 24.7語 |
| II | 594 | 13,949 | 23.5語 |
| III | 501 | 11,405 | 22.8語 |
| IV | 687 | 17,619 | 25.6語 |
| V | 498 | 12,216 | 24.5語 |
| VI | 408 | 11,031 | 27.0語 |
| VII | 540 | 14,300 | 26.5語 |
| | 637 | 17,860 | 28.0語 |
| 全 体 | 4,462 | 113,099 | 25.3語 |

つまり彼は、平均25.3語から成る文を書いているわけで、これは、ギリシアの散文家の書いた文の中で短い方ではないことは言うまでもないが、さりとてとくに長い方でもない。とすると、トゥキディデスの文は長くて読みにくいという印象は事実とは相違している、ということになる。しかし事実とは相違していても、こういう印象が一般に広く流布しているのも事実である。われわれはたまたまぶつかるトゥキディデスの長文に閉口して、トゥキディデスはいつも長文を書くという印象を得ているのだろうか。一方また、25.3語がトゥキディデスの文の平均の長さだとするならば、表①に挙げた18個の文などは、その平均の4倍以上、1 (V 16.1) にいたっては6倍以上の長さをもっているわけで、トゥキディデスは何のためにこんなに長い文を書いたのだろうか、と問うに値するだろう。しかしその前にもう一つ表を掲げておく。

表③

| | 31語以上の文 | 51語以上の文 | 71語以上の文 | 100語以上の文 |
|------|-------------|-------------|------------|----------|
| I | 124 (20.8%) | 46 (7.7%) | 13 (2.2%) | 3 |
| II | 107 (18.0%) | 40 (6.7%) | 8 (1.3%) | 2 |
| III | 90 (18.0%) | 22 (4.4%) | 5 (1.0%) | 0 |
| IV | 155 (22.6%) | 59 (8.6%) | 13 (1.9%) | 1 |
| V | 107 (21.5%) | 39 (7.8%) | 8 (1.6%) | 2 |
| VI | 97 (23.8%) | 39 (9.6%) | 10 (2.5%) | 4 |
| VII | 141 (26.1%) | 51 (9.4%) | 11 (2.0%) | 3 |
| VIII | 173 (27.2%) | 74 (11.6%) | 20 (3.1%) | 3 |
| 全 体 | 994 (22.3%) | 369 (8.3%) | 88 (2.0%) | 18 |

表中のパーセンテージは、各巻の記述文総数(表②参照)に対してのもの。

この表から、VIII(第8巻)は他の巻に比べて問題なく長文が多く、反対にIII(第三巻)には長文が最も少ないことが分かる。同じことは表②の、各巻ごとの一文の平均語数からも推定できる。22.8語(第三巻)から成る文と28.0語(第八巻)から成る文とでは、その語数の差はわずか5語と少々で、これはたいた差ではないと言われそうだが、個々の二つの文の比較ならばそう言えても、500個だの600個だのの文の平均値を比較した場合には、かなりの差と断定して差し支えない。つまり、個々の文が長い短いということのほか、巻全体に長文を多く含んでいる巻とそうでない巻とがあるわけで、この巻による差は何だろうかと問うこともできる。そして、ここでまた、一つの文の平均語

数が25.3である時に、50語以上の文というのがすでに長すぎる文と言ってもよいし、160語などというのは言語道断とも思えて、それならば、それが4.4%しかない第三巻に比べて、それが11.6%もある第八巻は、長すぎる文がそれだけ多いということであり、それだけ推敲が不足している巻だと言えるかもしれない、という方にわれわれの考えを導いて行く。しかし第八巻というのは、すでに推敲不十分という定評のある巻だから、なるほどどうなずいておけばすむが、第六巻、第七巻にも長文が多い(表②③を参照)のはそれでは説明できない。これは有名なシンリー遠征の悲劇的記述で、十分に推敲の行われた巻だということ、これも定評があるからである。そこでわれわれは、巻ごとに長文が多いとか少ないとかいうことよりは、やはり表③の直前で問うたように、トクキュディデスは何を記述する時に長文を用いたのかを問う方がいっそう適切であるということになる。

2

まず I 130.1-133を見ようと思う。ここには13個の文があるが、その語数は72, 17, 11, 83, 18, 33, 97, 25, 23, 13, 13, 104, 116と揺れていて、短文・長文入り乱れており、何がトクキュディデスの文を長くしたり短くしたりしたかを観察するのに甚だ都合だろうと思えるからである。

この話の主人公はスパルタの将軍パウサニ阿斯である。もともと彼は傲慢で、出先での苛斂誅求ぶりによって悪名が高かったが、その彼がペルシア王と気脈を通じていると疑われ、一旦スパルタに召喚されたが証拠不十分で釈放され、彼はビュザンティオンに赴いた。そしてトクキュディデスの記述によれば、彼はここでまたペルシア王クセルクセスに手紙を送り、「ギリシア全土を大王に献上いたす」と申し出で、大王の信任厚い者一名を今後小生との連絡係として与えたまえと請うた。クセルクセスはアルタバズスなる者にその任務を与え、パウサニ阿斯には、勇気を奮って計画実現につとめよと書き送った。これが I 129までのいきさつで、さて、以下次のようにつづく。

130. 1. (72語)：①パウサニ阿斯はこの手紙を受け取ると(分詞構文)、②以前にも、ブラタイアの戦いでの指揮ぶりによってギリシア人から大いに高く買われたことはあったが(分詞構文)、③「このたびはそれよりはるかに得意になって、*καί* ④もはや(万事を控え目にする)ギリシア伝統の習慣に従って生きることができず(*οὐκέτι...διῆλδ*)、⑤⑥ペルシア風の衣装をまとうて(分詞構文)、ビュザンティオンを立ち出で、」

「**Γ**」内は主節（主語は「彼」）以下同様 *καί* ⑦「トラキアに行く彼にはペルシア人とエジプト人の従者が随伴し、」[主語は従者] ⑧「ペルシア風の食卓を用意し、」(*τε*) [主語は「彼」] *καί* ⑨「真意を隠すこともできず」(*οὐκ ἔδύνατο*), *ἀλλὰ* ⑩「上記衣装や食事のような些細な振舞いによって、⑪彼が今後いかなる大事を為さんと胸中に思いえがいているかを（関係節）、⑫あからさまに示したのだった。」

以上を図式化すると次のようになる。ただし M=主節, p=分詞, pc=分詞構文, rel=関係節。() は、例えば M(pc) は、pc を内に包んでいる主節を示す。—pcpcM *καί* M *ἀλλὰ* M *καί* M *τε* M *ἀλλὰ* M (rel)。6個の文 (M。そのうちはじめのMには2個の pc が先行して H₁ の形をとり、最後のMも rel を内包して H₁ の形をとり (本誌 言語篇11 (1987) の拙論「トゥキュディデスにおける Parataxis と Hypotaxis」, p.12 を参照)、中間のMはすべてO) が *καί* と *ἀλλὰ* によって等位につながっている。つまり全体はP。—①②③…はもちろん筆者によるものであり、この区切り (cola) はギリシア語原文とできるだけ同じにしてある。6個のMが *καί* と *ἀλλὰ* によってPの形でつながっているだけなので、M同士の結びつきはあまり強くなく、切ろうと思えば切れる。しかし、始めと終わりを H₁ で押さえあって、従ってこれは、真意をあからさまに表明したパウサニアスの行状という一まとまりをなすであろう。なお、はじめの H₁ 中の2個の pc の最初のは単純に時を示し、2番目のものは「以前にも」「得意になった」ことがあると説明し、さらにMの今回の「得意になった」度合いを説明するための比較の対象ともなっている。

130. 2. (17語) : また (*τε*) ①「彼は自分を近寄りがたい人間として世間に対し、」そして (*καί*) ②「誰に対しても等しく、怒りっぽく気むずかしく振舞った」のでその結果 (*ὥστε*) 誰も彼に近づくことができなくなった (*μηδὲνα…δύνασθαι*)。

130. 2. (11語) : ④少なからずそれゆえ (*διόπερ*)、「ペロポネソス連合軍がスパルタを捨ててアテナイに与することになった。」

①はO, ②はMで、③の *ὥστε* 以下は不定法 (inf) によって②のMに対する結果節をなす。そこでこの文の構成は O+H₂。+はOとH₂が paratactic に結ばれている (P) ことを示す。④の頭の接続詞 *διόπερ* を、本来の *διὲς ὅπερ* を生かして読めば、④は独立文であることをやめ、全体が関係節となって前文につながり、その結果前文の H₂ の規模が大きくなるが、大勢に影響はない。つまり 130. 2. のこの二つの文は、③と④の間でつなぐも切るも自由 (読者であるわれわれにとっても、筆者であるトゥキュディデスにとっても) だということ。つなげば28語から成る O+H₂ という文になり、切り離せば、17語の O+H₂ と

11語のOになる。ちなみに③末尾の句読点はセミコロンである。

131. 1. (83語)：①「ラケダイモン人は(うすうす)感じていたが(pc), これらの所業ゆえに彼の第一回召喚を行なったのだった。」そして(*καί*) ②彼が今また、ラケダイモン人の指示も受けずに(絶対的属格 *ga*)、③またまた前回同様のことをやったことが明らかになった、④つまり、アテナイ軍によってビュザンティオンを力づくで明け渡させられたのに(pc)、⑤スパルタへは戻らず(*μὲν*) トロアスのコロナイに腰を据え(*δέ*), (*ἀλλά*) ペルシア人とよろしくやっております(目的補語としての分詞 *p*)、よからぬ理由でそこに滞在している(*p*)、とスパルタ人のところへ知らせが入るに及んで(*ἐπειδὴ*)、かくては(*οὕτω*) ⑥「彼らもはや黙過しあたわず、」(*οὐκέτι…ἀλλά*) ⑦「スパルタのエポロイたちは、スキュタレを携えた伝令使を送り(pc)、そこを動くな、もし命令に従わぬ場合には、スパルタ人は汝に対し戦を宣するものである(*inf*)と伝えた。」

今度は上のパウサニアスの行状に対するスパルタ政府の対策である。②に始まって⑤の終わりまでつづく副詞節(*ἐπειδὴ* に始まる *temp*, 間に *ga*, *pc*, *μὲν…δέ*, 2個のPなどが並ぶ)が少し長すぎる嫌いはあるものの、 $H_1 + H_3$ となる。長いけれども比較的構成のつかみやすい文になっていて、この構成に沿うて事態をすっきり把握することができる。つまり83語という長文だが、必然性があると言える。

これに対してパウサニアスはどうしたか。

131. 2. (18語)：できるだけ怪しまれぬようにしようと考え(pc)、金を使えば(与格 *dat*) 告訴を事なく取められるだろう(*inf*)と信じて(pc)、「彼は二度目の召喚に応じて帰国した。」
131. 2. (33語)：そして(*καί*)「彼は(*μὲν*)エポロスたちによってまず投獄された」(エポロスたちには王に対してでさえこうする権能がある)、が(*δέ*)「後日いろいろ試みて(pc) 獄から出るを得て、」そして(*καί*)「お望みとあらば誰の訴えでも受けて裁きを受けようとみずからをさらした。」

パウサニアスの対応が二段になっている。先の文では、彼の思惑が2個の *pc* となって「帰国した」というMにかかって、きちんと締めくくりがついた典型的な H_1 、後の文は、カッコ内の挿入文による注釈を別とすれば、 $O + H_1 + O$ の形になっており、はじめのOと H_1 は *μὲν…δέ* でPの構成、その H_1 と最後のOは平凡に *καί* で並列していてこれもP、全体もPと考えて差し支えないであろう。この二つの文を一つにまとめるべき理由も、これ以上の文に分割すべき理由も見いだし得ない。

さてそこでいよいよ裁判になるが、

132. 1-2. (97語)：①「彼の敵対者にせよ、ポリス全体にせよ、およそスバルタ人は (*μέν*)、明確な証拠というものをもっていなかった。」つまり、②何かそれに基づいて、王族の一員であり (p)、目下のところは大に敬われている (p) 人間 (すなわち彼は、まだ若くはあるが王であるレオニダスの子のブレیتالコスの子の従兄弟であり、保護者であったゆえに) を、自信をもって確実に罰することができる証拠をもってはいなかった。③一方また「彼の方でも (*δέ*)、世のしきたりを無視して、かつペルシア風をまねたりして (dat)、現在の秩序の中で自分たちと同等であること (inf) を欲していないのではないかと疑われる材料をむやみに提供した。」④それに「このほかの点でも、彼らは彼を事細かに詮索した。彼は何か祖先伝来のしきたりをはみ出した生き方をしていたのではないかとか (Object としての名詞節 nc)、あるいは、ギリシア軍がペルシア軍から奪った戦利品で、初穂としてデルポイのアポロンに奉納した鼎に、みずから勝手に次のようなエレゲイオンを刻んだではないか (nc)、
ギリシア軍の大將としてペルシア軍を攻め滅ぼせし記念に
パウサニアス、ポイボス・アポロンにこれを奉納す、
と。」

以上の文で、②の部分は①の主節にかかっている、従って①②合わせて H_2 、そして①のはじめの *μέν* が、③のはじめの *δέ* と対照していて、①②の H_2 と③ (これも H_2) とは P の関係。しかし、P ではあっても、そしてそれぞれの主語が、一方はエポロスたち、一方はパウサニアスと異なっている、*μέν…δέ* で結ばれているから、このつながりは強いし、また *μέν…δέ* だから、エポロスたちの疑念とパウサニアスのいい気な無造作ぶりが対照されている。そこへ行くと④ (これも2個の名詞節を従える H_2) とそれ以前のつながりはそれほど強固ではない。切りたければ切れる。第一、③で一旦パウサニアスに転じた主語が、④ではまたエポロスに戻っている。従って③と④のつながりにはある種のきしみを感じる。しかし、いざ裁判を始めてみようとしたが、はっきりした証拠は何一つない、しかしはっきりはしないが何か臭いという材料なら山ほどある、ということ述べている点では一括することができる。 $H_2+H_2+H_2$ という構成である。なお、97語という語数には、末尾の2行のエレゲイオンは含まれていない。これは韻文で引用文だからである。

132. 3. (25語)：「ラケダイモン人たちはその時、鼎からこのエレゲイオンを直ちに削り落とした。」そして (*καί*) ペルシア軍を打ち破るのに力を貸してこの奉納品を献上した限りの (rel) 「すべてのポリスの名を削んだ。」

O と関係節 (rel) を内を含む M、すなわち H_1 が *καί* で結ばれて P。とくに注すべきことはない。

132. 3. (23語): 「しかしながら (*μέντοι*) こうした所業は、その当時にも、悪行でありかつまぎれもなくパウサニアスの振舞いである (*inf*) と人々には思えた。」そして (*καί*) それが今また同じ状況になったので (*ἐπέλ*, *gr*)、これは彼の胸の中にまちがいなくある意図を反映しているのだ (*inf*) ということが、「前回よりはるかにはっきりとしてきた。」

「」が妙な所につけてあると思われそうだから念を押しておく、主節および単文(独立文)を「」でくるのである。—*inf* を含んだ H_1 と *ἐπέλ* に導かれる理由節 (*gr*) の先行する主節、つまり H_1 とが *καί* で結ばれて H_1+H_1 、これもとくに注することなし。

132. 3. A (13語): 「彼らはまた、」彼がヘイロテスたち(奴隷)に対してひそかに事を運んでいる (*inf*) との「情報も耳にした。」そして (*καί*) 「まさにその通りであった。」

前半の文は不定法が後回しになった H_2 、それが *καί* で次の単純な O に P の形でつながっている。ついでながら、末尾の句読点はセミコロン。

132. 3. B (13語): つまり (*γράφ*)、もし (*ἴν*) 彼の反乱に加わり、最後まで彼と行を共にするならば(条件節 *cond*)、「自由にしてやる、市民権をあたえてやる、と約束していたのである。」

この文(構成は H_1) は明らかに前の文、すなわち A につながっている。従って A、B を二つの文と見るよりは一つの文と見る方が適切である。なるほど H_2+O+H_1 という25語から成る文とするよりは、間で切った方がらくに読める。しかし切らない方がトッキュディデスの通例である。

しかし次に突然という感じで長文、それも聞く者の耳にかなり無理を強いる文がくる—

132. 5. (104語): しかし (*ἀλλά*) 「それでも彼らは」(パウサニアスにつきながら) 彼らへの密告者となったヘイロテスたちを信用もしなかったし (*pc*)、「彼に対して厳しく当たるのはよくないと考えた。」②彼らと同等の者たちに対する時お決まりとなっていた (*rel*) いつもながらのやり方に従っただけ (*pc*)、すなわち ③相手がスパルタ市民であるならば(副詞句)、異論を挿しはさむ余地のない証拠がない限り(副詞句)、取り返しのきかぬ決定を急がぬこと (*inf*)、である。④そしてついに (*πρίν γε*)、これは噂であるが(*ὡς λέγεται*)、パウサニアスがベルシア王に宛てた最後の手紙をアルタバゾスに届けるはずの者 (*ὁ μέλλων…κομμεῖν*)、⑤これはかつてパウサニアスの稚児で、彼が非常に信頼を寄せていた男 (*ἀνήρ*) だったが (*pc*)、その男が密告者になった。[それは⑥考えてみると、自分以前に使者として送られた者が一人として二度と帰ってきていないこと (*nc*) を恐れ (*pc*)、⑦万一自分の予想が間違っていたとか (*cond*)、

パウサニアスが手紙の内容を手直しするからよこせと要求するとかしても (cond), ③見破られないように (目的節 fin), 封印を偽造した上で (pc) 手紙を開けた。⑨すると [そこには (以下 rel)], 彼がそういう指示が多分書いてあるのではないかと疑った通り, ⑩彼 (すなわちこの手紙を持参した者) を殺せ (inf) と書いてある(p) のを見つけた。

通常の散文家ならばこの文は, ③と④の間で切って二つの文にするところだろうが, ④を *πρίν γε ὅγ* … (until, indeed, …) という従属節にして③につなげて, ひいては①の主節につなげた。ここに無理がある。この *πρίν γε*… が簡単ならよいのだが, ④でまず *ὁ μέλλων…κομίζειν* と言い, それを⑤の分詞構文でどんな人物かを具体的に説明し, ことのついでにその *ὁ μέλλων*… と, ひいては *ἀνὴρ* とを主語にして, 彼が密告者になった, そして密告者になったいきさつは, 彼が托されたパウサニアスの手紙を開封したからで, ではどうして開封したかという恐れを抱いたからで, なぜ恐れを抱いたかという殺されるのではないかと思ったからで, しかし開封するにはかくかくの用心をして…というように, この *πρίν γε*… という, それ自身①の従属節の地位にある文にさらに, 続々と従属的な句がつけ加えられている。上の引用文中⑥~⑧, および⑨の [] でくるんだ部分がそれである。そこで読む方では, 延々と従属の従属の, そのまた従属の, もう一つ従属の, と読まされて記憶が定かなくなり始めた頃に, やっと「見つけた」と収まってほっとするのだが, 実はこの壮大な H_1 が *πρίν γε* に始まる従属節にすぎなかったこと, 従って全体は H_2 というペリオドスだったことに気づかされて驚く。④以下はあくまでも手紙を托された男の恐れと行為であって, その限りで④以下の H_1 の構成は見事と言うことができるが, ①~③はエポロイたちの煮え切らない態度を述べているので, ④以下とはまったく別のこと, 従ってはじめにも言ったように, ここは切って二つの文にする方が自然だと言えるのである。それを, *ἀλλά* とか *μέντοι* とかをういて P のつなげ方をするのならまだしも, 従属節という, いっそう有機的な, しかも文字通り従属させる形で前文につなげ, その結果手紙を托された男の恐れも行為も, エポロイたちの煮え切らなさとの関係においてのみ捉えられることになった。しかしトゥキュディデスはそのように捉えたからこそこう書いたのである。

やっと一山越えると, 次にまた長大な文が読者を待ち受けている。上記表③の31語以上の文が20.8%あるというのは, ほぼ文章5個に1個の割で, 通常のトゥキュディデスの文より長めの文を読まされるということであり, 51語以上

の文が7.7%というのは、その長めの文の40%近くは決定的に長く、さらにそのうち三つに一つは手のつけようがないほど長いということであって、これでは読者としては、トッキュディデスの文は長くて読みにくい、という印象を得るのはやむを得ないと思える。ましてやここでのように、100語以上の文が二つもつづけばなおのことであろう。次の文はトッキュディデスの叙述文4,462個(上記表①参照)中13番目に長い文である。さて、

133 (116語): ①さてそれから、件の男が書状を示すと (ga), ②「さすがのエポロイたちも (mév) 今までよりは信じた」が、③それでも (dé) パウサニ阿斯本人が語るのを自分たちの耳でじかに聞きたいと思ひ (pc), (そこで) ④件の男はあらかじめ準備をととのえて、嘆願者としてタイナロン (の神域) へ赴き (ga), ⑤そこに内部を壁で仕切った天幕を建て (ga), ⑥その仕切りの一方に数名のエポロイを潜ませた (rel)。⑦そして、パウサニ阿斯がやってきて、彼が嘆願者としてここへ来たわけを問うた時 (ga), ⑧「(潜んでいた) エポロイたちは一部始終をはっきりと聞いたのだった。」(すなわち彼らは) ⑨かの者が、パウサニ阿斯が手紙の中で自分について書いたことで彼を難詰し (p), ほかにいもいちも事立てて (p), ⑩これまで殿から仰せつかったベルシア王への使いにおいて、殿の御意に背いたことはばかりながら一度もない、しかるにその彼が殿から賜る特別の恩賞たるや、凡百の奴隷どもと同じく死であること (nc) を暴露する (p) のや、⑪パウサニ阿斯がそれに相違ないと認め (p), ⑫このたびのこと怒るでないぞと言ひ (p), この神域から無事にたたせてやると約し (p), 少しも早くベルシア王のもとへ走れと命じる (p) のを「聞いたのであった。」

以上のうち、①は絶対的属格で主節(②)にかかり、従ってここまでは H₁, ただしその主節の中には mév があって、③の分詞構文中の dé と対応して後につづく文と P でつながる。ところがこの分詞構文は二つの絶対的属格(④⑤主語は共に「かの男」), その⑤の中の「天幕」を先行詞とする関係節(⑥), 絶対的属格(⑦主語はパウサニ阿斯)と共に、すべて⑧という主節にかかっている。従って③～⑧もまた H₁ をなして、それが②と P で並んでいるように思えるが、実はまだ後がある。⑨以下文末まで全部はその主節(⑧)中の述語動詞(「聞いた」)を受ける目的語と目的補語(補語はすべて分詞)になっていて、しかもそのうち、⑩の中の補語(「暴露した」)は、二つの名詞節を目的節(nc)として従えている。従って③～⑫は長い長い H₃ をなして、全体は H₁+H₃ という構造になっているわけである。ただし、このうち H₁ の語数は僅かにはじめの11語にすぎず、残りの105語は H₃ の方に属しているというのは、あまりにも平衡を破りすぎると言わざるを得ない。しかし意味の方から言えば、②は「今までよりも信じた、」③は「しかし自分の耳で確かめたいと思った、」というのだから、これが mév…dé で対照されるのはごく自然なことである。自然で

ないことはその次にある。というのは、③までは、手紙を見せられたエポロイの反応であり、④以下は例の男がやったことなのだから、ここに切れ目がある。文の主語もちゃんとそうになっている。従って、③を分詞構文にして④につなげることに無理があるのであって、ここは③を独立文にして一旦締めくくりをつけ、そして「そこで…」と新たに文を起こせばよい所だろう。恐らくトゥキュディデスの考えでは、エポロイはパウサニアスの言うことをじかに彼の口から聞きたいと思った、そして例の男がその機会を作ってくれた、つまり彼らの期待が実現した、希望とその実現だからこれは一つながりの文で述べてよい、ということになるのだろうが、それならそれで、せめて④以下の主語を③までと同様エポロイにしておけばよい。しかしそれでは史実に反すると言うのならば、ここで文を切るべきであろう。

以上パウサニアスをめぐるトゥキュディデスの文の書き方を見てきたが、これでOCTの約2頁半。問題だと思えた箇所をまとめてみると、

1. 132. 1-2. (97語)：文の主語に揺れがあってすっきりしない。ただし内容から見るとこれでよい。
2. 132. 3. の2個の短文は2個である必然性がない。
3. 132. 5. (104語)：前半と後半で主語が違うので、2個の文にすべきところを、従属節として前文につないでいる。
4. 133. (116語)：やはり主語の違い2個の文を強引に一つにしている。

これ以外には問題はなく、むしろ、長い場合も短い場合もそれぞれ必然性あつてのことだということは、上に見た通りである。そして今挙げた4例のうち2番目は、トゥキュディデスもこういう文を書くことがある、という例として覚えおけばよいと思うが、それよりは、1, 3, 4に共通して、主語の違い文を無理してつなげて一つの長い文にしているということの方が問題で、これは検討するに値するであろう。はたしてトゥキュディデスの長文には多かれ少なかれこの傾向があると言えるのだろうか。とくに、50語や60語の文章ならば誰でもとは言わないまでも多くの人が書くだらうが、上の三つの例のように、90語だ100語だという文章というのはやはりどこか異常で、何か無理強いをして書いた文だと言ってしまえるのか。

3

そこで次に、トウキュディデスが書いた最も長い文（V 16. 1.）を見ようと思う。160語、OCTだと1頁の3分の2、Loeb版に至っては1頁そっくりがこの文で占められている。—ペロポネソス戦争もすでに9年を閲し、今や10年目に入っている。これより2年前、アテナイはスパルタの将ブランダスにトラキアの要衝アンピポリスを攻略され、トウキュディデス自身、その時の作戦の下手際を責められて20年間の追放を宣告されていたが、最近、アテナイの扇動家クレオンがこのアンピポリス奪回を試みて失敗した。クレオンは戦死、しかし勝ったスパルタ側でもブランダスが戦死した、そういう状況である。さて、

しかし①アテナイがアンピポリスで敗戦の憂き目にあい、②クレオンもブランダスも戦死してしまった時（ἐπειδὴ）（temp）、（実は）彼らは（οἱνερ）それぞれの国で最も強硬に和平に反対していた（のだが）（rel）、（それは）③一方は、（今まで）幸運に恵まれていたこと（inf）と、戦うからこそ（inf）名声を得ていたからであり（δεῖαによる前置詞句）、④一方は、⑤平和にでもなれば（ga）、④自分の悪行が明るみに出るだろう、また、（今まで）自分が口にしていた中傷の数々のために世間から信頼されなくなるだろうと思って（pc）（のことだったのだが、その二人が戦死したとなると）
[ここまで従属節、45語]

その時（τότε）⑥「両国において、スパルタ側ではパウサニアスの子で王であるブレイストアナックス、アテナイ側ではニケラトスの子で、当時の将軍の中では最も作戦の功を挙げているニキアスが、」⑦とくに熱心にそれぞれ自国のために和平に熱意をもっていたが（pc）、⑧「いっそう熱心にその政策の主導者となった。」（それぞれの事情はこうであった。すなわち）⑨ニキアスとは言えば（μὲν）、[⑩自分がまだ無傷であり重んじられているうちに（rel）]⑨自分の幸運を守りつづけ（inf）、さしあたっては自分が苦勞から解放され（inf）、アテナイ市民たちも休息させ（inf）、将来に向けては、国をつまづかせるようなことは何ひとつせず（pc）一生を終えた（nc）とて、名を遺したい（pc）、⑪しかしそういうことは、運に身を委ねること最も少ない者こそ、危険を冒さずに達成できるのだと信じて（pc）、[そこで平和を希求した。]⑫一方ブレイストアナックスの方は（δέ）、彼が追放先から帰国したことで政敵から攻撃され（pc）、また⑬彼が国の法を犯して帰国したために（δεῖαによる前置詞句）そういうことが起こったかのように敵から攻め立てられたので（pc）[和平工作で指導的立場に立つとうと思ったのである。]

これは長いけれどすっきりした、たくまれた構文である。冒頭に ἐπειδὴ で従属節を始め、τότε でそれを受けて主節を置いている。だから全体は巨大な H1

である。そして従属節の方では、クレオンとブラシダスが戦死すると和平の機運が高まったのはどういう事情によってなのかを、③の前置詞句と④の分詞構文で説明している。これで従属節は終わりで45語、従って残りは115語だが、主節そのものは(⑦の分詞構文を含めても)32語だけで、あとの83語は⑨～⑬の従属的な部分、つまり、主節そのものが大きな H_3 の構造をなす。ただし構成は明晰で、⑨に *μέγ* があって、ニキアスが平和を希求した事情、⑩に *δέ* があってプレストアナックスが平和へと心を動かされた事情、つまりいずれの場合も心の動き、行為に踏み切った動機、が示され、こうしてトッキュディデス最長の文は、それほど苦勞せず読めるばかりでなく、これが一つの文にまとめられているからこそ、かえって事情が呑み込みやすくなっている。この文は長いことに必然性があるばかりでなく、長いことが効を奏している。

しかし、今トッキュディデスが書いた最も長い文を見たので、ついでに表①に挙げた18箇所全部に目を通してみると、やはりその半数に何らかの問題があることが分かる。Ⅷ 99, Ⅵ 100. 1, Ⅴ 31. 3, Ⅷ 45.1-2, Ⅴ 17. 2, Ⅱ 13. 1, Ⅷ 90. 1, それと先ほど挙げたⅠ 132. 5. とⅠ 133. がそれである。このうちⅧ 99. はいわゆる *anakoluthon* で、文の主語を受ける述語動詞がないと言うべきか、あるいは、書いている途中で主語が変わってしまっていると言うべきか、とにかく破格構文である。*Anakoluthon* というのは話し言葉や談話ではのべつ起っている現象で、聞いている方でもあまり気にしない。しかし、書き言葉となると気にしないわけにはいかない。さらにこの文の末尾には() 付きの補足的説明が19語ほど添えられているが、ここには先行する文とつなげて一つにまとめるべき必然性はない。つまり到底補足とは言いがたい。のみならず、後続する文を読むと、意味の上でむしろそちらとのつながりの方がはるかに強いことが分かる。これら2点を併せて考えると、これはやはりトッキュディデスの推敲が十分に行われていないと解するのが妥当だろうということになる。しかし推敲が不足しているならばここでわざわざ取り上げるには及ばない。われわれが取り上げるべきは、トッキュディデスが書いて、そして、これでよいと思った文章だけだからである。そこで表①からⅥ 100. 1. を取り上げてみる。これは第6～7巻にまたがる有名なシケリア(シシリー)戦記の真ん中で、アテナイ軍がシュラクサイ攻撃のための壁を築いたのに対して、シュラクサイ軍もそれに対抗すべく、アテナイ軍の壁に直角に交わる壁を造築する条である。

①敵の壁に交差し建造される限りの壁が十分に建造出来た (inf) とシュラクサイ人た

ちに思え、②またアテナイ軍が彼ら（が建造するの）を妨害しに（p）現われもしなかった時（ἐπειδὴ）—（アテナイ軍はなぜ来なかったかという、そんな妨害をやったそのために）③兵力を二分するようなことになれば、敵にとっては戦いがらくになるのではないかと恐れたから（pc）であり、④また自分たちは自分たちで壁を延長する工事をしてきたから（pc）でもあった—⑤「シュラクサイ軍は（μὲν）」⑥「一部隊だけを壁の守備隊として遣して（pc）」⑦「一方アテナイ軍は（δὲ）」、⑧「シュラクサイに飲料水を提供すべく敷設してある（rel）管を破壊した。」⑨「そして（καί）」、たいていのシュラクサイ兵は昼休みのこととて天幕の中にいるが（対格 acc+p）、⑩中には市内（の我が家）に帰ってしまった者もいる（acc+p）、⑪また何人かは（壁の前の）防御柵にはいったものの、漫然と守備をしている（acc+p）のを見すましておいて（pc）、⑫「三百の軽装兵を先頭に、突如として敵の壁に向かって突撃を行なった。」⑬「一方（δὲ）これとは別に二手に分かれた隊が、⑭一方の隊はある指揮官のもとに、」⑮敵が壁に向かって急ぎ救援に駆けつけるであろう場合（cond）（に備えて）、⑯「シュラクサイ市に向かい、⑰もう一方の隊は別の指揮官のもとに、これは敵の壁の門の所に進らされている柵に向かって進んだ。」

さて、この137語の文の構造はとくにごたついているわけではない。ないが、全体は ἐπειδὴ に始まる従属節（①と②、そして②の説明のための2個の分詞構文③④が付随している）と、それを受ける主節—これは大きくは μὲν…δὲ で対照された⑤と⑦から成っている。従って⑦で文が切れれば（⑧は関係節だからどうしてもついてくる）、すっきりした構文で、読みにくくも何ともない（しかし⑦までですでに66語が使われていて、かなり長めの文にはなっている）のだが、⑨以下がつづくので、読むのに根気がいることになる。せっかく μὲν…δὲ ですっきりしているのに、その δὲ を含む文につづけて καί と書いた。そしてこの καί につづいて⑨⑩⑪の三つの acc+p という句を分詞構文に受けさせ、その分詞構文を⑫の文につなげた。しかも⑫の主語は⑦の主語がそのまま生きている。つまり⑫ではあらためて主語が提示されることなく、読者は⑦の主語がアテナイ軍であったこと、その主語はまだ生きていることについてここまで注意と記憶を保って、⑫は実は⑦のつづきなのだと意識しなければならない。そこで読みにくくなるばかりでなく、またバランスが崩れる。⑤の μὲν 節は12語、⑦の δὲ 節は、⑧を含めば17語、含まなければ8語、とほどほどに釣り合いがとれていたのが、⑫までつなげてしまったために、μὲν 節12語、δὲ 節60語という、大変に不均衡な文ができてしまった。しかもそれで終わらない。今度は καί さえ使わない、簡単に δὲ で新たな主節を起こす（⑬）。そして⑦⑫の主語が「アテナイ軍」であったのに対して、⑬の主語は「部隊」である。どうせ μὲν…δὲ の均衡を⑦～⑫で崩してしまったのなら、せめて⑬の主語も⑫と同じ

にしてある方がまだしも読みやすいのに、別の主語を据えた分だけ、読者はまた一瞬立ち止まることになる。

たしかにこの文は、壁をめぐる両軍の対峙と戦闘を述べている点で一つのことを言っている。しかし、一つのことというのなら、この戦闘の記述は、この後さらに4個の文(67語)を要している。そして、さすがの、と言ってよいかどうか、トッキュディデスもこれらをまで一つの文に組み入れることまではしなかった。問題は、VI 100. のここまではなぜ一つの文なのか、ここから後はなぜ4個の文になるのかである。

4

VI 100. 2. (7語):そして($\kappa\alpha\iota$)「例の三百人の軽装兵が」敵の防柵に襲いかかって($\rho\epsilon$)「これを奪取した。」(簡単な H_1 , 文末の句読点はセミコロン)

100. 2. (13語):そして($\kappa\alpha\iota$)「守備隊は」その防柵を捨てて($\rho\epsilon$)「テメニテス方面の城壁へと敗走した。」(これも簡単な H_1)

100. 2. (25語):そして($\kappa\alpha\iota$)「アテナイの追っ手は彼らに襲いかかった。」しかし($\kappa\alpha\iota$)城壁内に入るや($\rho\epsilon$)、「シュラクサイ軍によって力で押し戻された。」そして($\kappa\alpha\iota$)「若干のアルゴス兵および少数のアテナイ兵がそこで戦死した。」(H_1+H_1+O)

100. 3. (22語):そして($\kappa\alpha\iota$)全軍が退却し($\rho\epsilon$)、「(シュラクサイ軍の)壁を打ち崩し、柵を引き抜き、その柵の杭を自軍の陣地へ運んで、そして勝利記念塚(トロバイオン)を盛った。」(H_1+O+O)

要するにO, または簡単な H_1 という短文が、「そして」($\kappa\alpha\iota$) という接続詞を媒介として並んでいるだけである。これらの文で言っていることは、「アテナイの三百人隊が城壁内に乱入したが、今度はシュラクサイ軍に押し戻されて退却し、行きがけの駄賃に敵の柵を引き抜いて奪ってきて、日本でなならさしずめ万歳を三唱した」ということである。もっと抽象的な言い方をすると、こっちがこうしたらあっちがこうした、そこでこっちがこうしたらあっちがこうした、ということの連続であり、さらに抽象的に言えば、「敵味方それぞれの行動の記述」と言えばすむ。すむというのは、そのほかには何も言っていないということである。こうして文章も簡単だが、実はその文章によって記されている行動そのものがすでに簡単なのである。ここには、なぜそういうことになったのかといういきさつの説明もなければ、個人にせよ集団にせよ、なぜそうし

たのかという理由や動機の説明もない。そのような説明を必要としない単純明快な行為の記述なのである。言い換えれば、トウキェディデスの文を長くしていたのは、そういう事のいきさつや、行為の理由や動機の説明だったのだと断言できそうである。

と同時に、もうひとつ別の見方もできそうである。というのは、考えてみると、この壁をめぐる戦闘そのものの記述は、実は今挙げた 100. 2-3. の4個の短い文によっているのであって、100. 1. の長文は全体が、そこに至るまでの経過の記述だと言えるからである。経過だからそこにはいろいろ複雑な事情がからんでいるし、いろいろの駆け引きもある。しかし、そういう段階を経ていざ決戦となると、もはやあるのは行動のみで、兵士の行動は戦って勝つか負けるか、生きるか死ぬかしかない。そして、経過はじっくりと細密に記すが、戦闘そのものは起こったことを起こったように記すのみ。経過の方はじっと腰を据え目を据えて観察し理解しなければならないが、戦闘の方はその有り様を目で追い、目に入ったことを目に入った順序で平たく述べなければならない。と同時に、この叙述には動きがなければならず、そのためには文章が、読者にテンポを感じさせるものでなければならないだろう。とすれば、そのためには短い文の積み重ねが最もふさわしく、反対にペリオドス、ことに主節の後に続々と従属部分がつづく文章は、読者を考え込ませたりうなずかせたりすることはできても、戦闘の記述には向いていないと言える。

5

今述べたことを、戦闘と言わず一般に、事実を事実として記述する場合には、というように言えるかどうか。そこで次に第二巻の、有名な悪疫流行の記述でそれを確かめたいと思う。なぜなら、疫病には理由と多少のいきさつはあっても、動機などというものはないはずで、従ってここの文章は短文の連続になっているだろうと予想されるからである。この記述はⅡ 49-54. にあり、OCTで4頁半ほどの量であり、57個の文から成る。具体的に見てみよう。次の表中カッコ内は節番号であり、例えば【§49】18, 10, 41, …というのは、第49節の最初の文が18語、次の文が10語、次が41語等々から成っているということである。

【§49】 18, 10, 41, 21, 24, 19, 20, 29, 14, 11, 12, 60, 28, 21, 18

【§50】 31, 17, 2, 16, 11 【§51】 24, 10, 7, 10, 12, 7, 20, 40, 6,

16, 8, 25, 24, 9, 28 【§52】 22, 37, 11, 18, 15, 15, 23 【§53】 13, 30, 18, 18, 16, 55 【§54】 15, 23, 25, 9, 20, 27, 10, 31, 7

案の定短い文ばかりである。そしてこれだけの文の語数を合計すると1,127語になるので、この箇所全57個の文は平均19.8語で書いてあるということであり、トッキューディデス全巻の平均25.3語(表②参照)に比べるとかなり短いと言える。しかしそうなる今回は、表中下線を付した文(この箇所の平均語数19.8語の倍以上の語数をもつ文)は、それぞれなぜそういう長さになったのかが気になるであろう。すなわち [1] 49. 2. : 41語, [2] 49. 6. : 60語, [3] 51. 4. : 40語, [4] 53. 4. : 55語がそれである。順序通りに見よう。

[1] 49. 2. これ以外の場合には、はっきりした原因もなく、突然に、健康でいる人々を、まず頭のひどい発熱と眼の充血と炎症がとらえ、そして口の中は咽頭も舌もたちまち真っ赤になり、呼吸が不規則になり、異常な臭いがした。

これはごく普通の文章であって、何の曲もない。それがこれだけ長くなったのは、文の構成法によってではなく、文の内容によって規定されてのことにすぎないということが分かって、はぐらかされた感じがする。どうということかと言うと、先行する文でトッキューディデスは、「体にどこか悪い所があると、」と言っている。そしてこの文では「健康人の場合は」と言い、その健康人がこの病気に襲われた時の「最初の徴候」を述べているのである。ちなみに、次の文では、「症状の次の段階」を紹介し、次の次の文では「最終段階になると」と言っている。こういう次第で、この文がこの長さになったのは、この長さにならざるを得なくてこの長さになったので、ここには何も論ずべきことがない。

[2] 49. 6. ①そして体は〔②病気が猖獗を極めている間は (rel) やつれず、大方の予想に反して病苦に耐え抜いた。③それゆえ (*where*)、多くの患者が発病から7日目ないしは9日目に死亡したのだが、④その時もなお、なにがしかの体力が残っていた (pc)。あるいは〔⑤ (この時) 死を免れると (cond)〕⑥病気が腹部に下がって行ってそこにひどい潰瘍を惹き起こすし (ga), ⑦また同時に激しい下痢が襲ってくるので (ga), ⑧このために体が弱って、ほとんどの患者はこれで死んだのである。

この文章にも目をむくような無理はない。大きくわけて①②と③以下に分かれる。①②はごく普通の H_i をなしているが、それに、*where* (「その結果…」) という接続詞によって③がつながる。一風変わっているのは、*where* 以下の文で、意味の上から言えば③よりは④の方が主節にふさわしいと思えるのに、トッキューディデスのこの文では③が *where* 以下の文の主節で、④は分詞構文である。

ただしこういう文の書き方は、トッキュディデスに最もしばしば見られることは確かだが、彼以外のギリシアの散文家にも意外に多い傾向である。なぜそうなるのか、理由を私は知らない。次に「あるいは」(苟)と言って、「この時死なずにすむ」とつづけ、⑥や⑦のようなことが起こって、それが原因で(その原因を絶対的属格で記し)、⑧で結局は死ぬ」と結ぶ。

もう一度繰り返すが、この文は①②と③以下で大きく二つに分かれる。そして、「この病気は症状がひどい割には体力の消耗が少ない」、これがこの文章の主題で、以下は全部そこから派生する結果なのである。つまり、⑥以下の諸症状がそれ自身記述の中心には据えられず、あくまでも、なかなか体力が消耗しないということに付随して、こういう症状が起こってやっと死ぬことになるという例もあったほどだと言っているのである。そうだとするとこの構文は至極もつともな構文である。

[3] 51. 4. この病気全般を通じて最も恐ろしいことは、自分がこの病気に感染したと感ずると、必ず無気力、投げやりな精神状態に人が陥ったことであった。(実際、たちまち絶望に落ち込んで、もう俺は駄目だという方にすぐ行ってしまい、抵抗しようとはしなかった) それともうひとつ、おたがい同士看病しあっては感染し、さながら家畜のごとく死んでいった、ということであった。

この文が長くなったのはカッコの中の説明文(16語)のためである。これを省けば24語しかなく、何の問題もない文章である。ただしカッコ内の説明は冗語、つまり不要であって、従ってこの文に関してまじめに問題にしなければならない点はない。せいぜい、トッキュディデスとしては異例の冗語(pleonasm)を、なぜ彼が書いたのだろうかと訝っておけばすむ。

[4] 53. 4. ①「また(δέ)神々への畏敬や人間の法も平然と触れられた。」②それは、一方では(μέν)、どんな人間でもみな同じく死ぬのを(acc+p)見たことにより(inf)、敬虔であろうとなかろうと(inf)、同じだと人々が考えたためであり(pc)、③他方(δέ)、自分の犯した罪を償う罰を受けるほどまで生きていられる(inf)とは、誰も期待しなかったから(pc)であり、④むしろ(δέ)(そんな将来の不確かな罰などよりも)はるかに大きな罰が現に与えられて(acc+p)、今にも降りかかろうとしている(inf)ではないかと思ひ(pc)、⑤そんな罰が身に降りかからないうちに生きることを楽しむに限ると考えた(rel)のである。

①が主節、あとは全部この①にかかる従属部で、従って文の構成は H_2 、まず②と③の分詞構文が、なぜ①のようなことになったのかという理由を説明し、そのうち②には μέν があって③の δέ を導入して対照。そして④の中の「罰」

を先行詞とする関係代名詞が⑤を従えている。そして④⑤の最後の「思った」「考えた」という動詞は書かれていない、ということは、④⑤の動詞としては、③と同じ分詞（あるいは③の分詞）を想定するほかない。そして、今のこの点もそうだが、この文では、長さというよりは、トゥキュディデスがこのように何とか簡潔な言葉使いをして全体を一つにまとめようと努力しているのが目立つ。とくに際立っているのは、①だけを主節にして、あとを全部分詞構文、あるいはその分詞構文の一つにかかる関係節にしたことで、そこでこの文を読むと、個々の具体的な現われが、みな「神への畏れも法も無力になった」ことに帰することができる、とトゥキュディデスが考えていたことが分かる。その点では見事なのだが、その反面、①以外を全部分詞構文にしたために、例えば②などが極端な例で、ここには、それ自身文になり得る要素が3個もあるが、それらをすべて、不定法や分詞を駆使して1個の従属句に詰め込んである。こうして、古代以来つとに有名な、トゥキュディデス特有の固い言い回しの典型をわれわれに提示してくれているわけである。一口で言えばこの文は、長さという点ではたいしたことはないが、一つの文にまとめようとして、通例のギリシア語の習慣から見れば無理なことをしているのである。

以上4箇所中3箇所は、取り上げるに値するほどの問題を含んでいなかった。しかし最後の53. 4. だけは、われわれが今まで見てきた諸例と（少しだけ様相は違うが）共通の問題を提供してくれたのである。

6

今度はそれなら、当事者たちの心の動きや事のいきさつなどの説明をあまりせず、ほとんど戦闘や事実の記述だけをしていながら長い文を用いている箇所というのが少しはないかどうか、確認しておきたいと思う。それとおぼしい箇所を順々に思い出してみると—Ⅱ 76, Ⅲ 23, 85, Ⅳ 31-32, 34, 36, 104-105, Ⅴ 72, Ⅵ 43, 47, 70, Ⅶ 69-72等々であるが、ここではⅡ 76（プラタイアをめぐる戦いの一部）とⅤ 72（マンティネアの会戦の一部）の2箇所だけを取り上げることにする。事実や行為の記述に徹していながら長い文というのが、一つでも二つでもあれば、われわれの考察のためには十分だと思えるからである。

まずⅡ 76. の方は6個の文から成っていて、それぞれの語数は20, 24, 21, 12, 56, 89である。はじめの4個の文（Ⅱ 76. 1. から3. のはじめまで）はあ

らすじを紹介するに止どめ、最後の二つの文(Ⅱ 76. 3. と 4.)のみをここに挙げることにする。一スパルタ軍がアテナイの同盟国プラタイアを攻めあぐんでい。一つには籠城しているプラタイア人の意志が強固なのと、もう一つには彼らが次から次にいろいろ奇策を編み出しては、スパルタ人を悩ませているからである。今も、スパルタ側がプラタイアの城壁に対し、外側から盛り土を高くしていくと、プラタイア側は、自分たちも対抗して城壁の上にさらに壁を造築して、無際限に高くしたり、城壁に穴を開けて、スパルタ人の盛り土を外からは分からないように削り取ったので、スパルタ人が土を盛っても盛っても陥没したりした。しかしプラタイア人は、こう多少に無勢では、いつまでも持ちこたえることはむずかしかりと恐れて、また別の計を案じた—

76. 3. (56語): ①「彼らは(敵の)盛り土と背くらべをする城壁上の大壁を建造するのを中止した。」そして(καί) ②「下の方、(すなわちもともとの城壁から始めて(pc), その城壁のあちら側とこちら側に、市内に向かって三日月形の城壁を造り始めた。)」③こうすることによって(δπως) ④「[かりに大城壁が占領されても(cond)]この壁が持ちこたえてくれようし、敵はこの壁を越えるためにまたまた土を盛らなければならなくなる、さらに敵がこの三日月の中へ入ろうなら(pc), 二倍の苦役を強いられ、かついっそう両側からの攻撃にさらされざるを得ないことになろう、そういう目的であった。

①と②は καί で結びれて共に主節。②には δπως に導かれた目的節③がつづき、③は④という条件節を含んでいる。③の δπως 節には、壁を主語として、「持ちこたえる」「必要とさせる」という二つの希求法の動詞を配し、後者に「土を盛る」「苦勞する」「…ということになる」という三つの不定法を従わせている。一実際に壁をどう造ったのか、記述が細かい割にはつかみにくい、語法上は取り立てて言うほどのことはない。しかし、目的節というのは純然たる事実・行為の記述とは違ふ、と言うこともできる。

76. 4. (89語): しかし(δέ) ①「ペロポネソス勢は土盛りをやると同時に、いくつかの仕掛けをこの都市に対して持ってきた。」②そのうち一つは(μέν) ③「盛り土の上に運ばれて(pc)〔城壁上に築かれた〕大壁を揺り崩し、プラタイア人を恐怖に陥れた(rel)もの、④また(δέ)ほかに、城壁の他の部分に別の仕掛けが運ばれたが、⑤プラタイア人は投げ縄をかけてそれを引き寄せた(rel)。また(καί) ⑥〔城壁上に離してねかせた二本の柱に、長い鉄の鎖をかけ、その鎖に大きな角材を吊して(pc)〕、⑦〔敵の仕掛けが城壁をまさに打ち崩そうとするたびに(temp)〕、⑧「鎖を手放してゆるめた。」すると⑨角材が⑩「えらい勢いで落下して(pc)〕、城壁崩し用の鎖の先をへし折った(pc)。

ここには意図も目的もない。スパルタ軍が破城鍵で城壁を崩そうとしたのに対して、プラタイア人が知恵をしばって臨機応変に対抗手段を考案して成功した、という話である。スパルタの「仕掛け」とプラタイアの「仕掛け」と、二つの仕掛けの合戦を、何とか一つの文にまとめようとしていることがありありと見てとれる文である。—①はスパルタ軍の仕掛けで、これが主節。そして②と④の下線を付した語は、①の「仕掛け」と同格名詞。トゥキェディデス以外の人なら恐らくここで一旦文を切る。しかしトゥキェディデスは、両軍の仕掛けを全部一つの文で言ってしまうおとするから、④の下線を付した「仕掛け」という同格名詞を先行詞として、⑤の「だがプラタイア人は…」という文を関係節にする。そして、ここで①の主節への従属部が終わって、次の⑥以下で新しい主節が始まる（ただし主節そのものは⑧になる。⑥⑦は⑧にかかる分詞構文）。この区切り方はいかにもトゥキェディデスらしい。今、トゥキェディデス以外の人なら④の終わりて文を一旦切る、と言ったが、彼の考えでは、一応の切れ目は⑤と⑥の間にこそある。なぜなら⑥以下は⑤とは別のプラタイア人の対抗策を述べるからであって、こういう所を見ると、トゥキェディデスという人は、一つことは一つの文にまとめる努力をしたばかりでなく、その文の中の切れ目をどこにするかについても、それをその文が伝える内容と一致するように工夫したことがわかる。そうするとこの文は、単に事実を記録するだけでも89語の文が書けるということの見事な例になる（構成は $H_2 + H_3$ ）。—多くの人はこの文章を、少なくとも④の終わり、⑤の終わりて区切って、三つの文にするであろう。

V 72. はアルゴス・マンティネア連合軍とアギス王率いるスパルタ軍の会戦の一端である。5個の文から成っていて、それぞれ60, 16, 57, 6, 61という語数で、長文と短文とが交互に現われる。

72. 1. は冒頭に $\xi\upsilon\upsilon\acute{\epsilon}\beta\eta$ と書いてあって、これは「誰それにとって（与格, dat）…するということ（不定法, inf）が起こった」というこの語の非人称の慣用に従って用いられている。不定法の意味上の主語はもちろん対格（acc）で示される。この文では次に示すように①②③⑥の4個の不定法が $\xi\upsilon\upsilon\acute{\epsilon}\beta\eta$ にかかっていて、主節に当たるのは $\xi\upsilon\upsilon\acute{\epsilon}\beta\eta$ だけ、あとは全部従属部である。この構文は、やや固い（ということは、別の言いかたをすれば、ややわざとらしい）言い回しながら、ごく普通の語法だが、それだけで60語もの文を構成した例というのは珍しい。ただし、ややわざとらしい分だけ、客観的な記述というよりは、観念的な解釈をまじえた記述という印象が読者には残るのは仕方がない。

そこで①彼(アギス)が(dat)まさにちょうど命令を発しようとしていた時に(p, dat), (自分の指揮下の部隊長の) アリストクレスとヒッポノイダスが(acc) 移動することを(inf) がえんじなかった, ②しかし彼らは(acc) 臆病と考えられ(p), 後日この罪により追放される(inf) ことになった。③そして敵軍が(acc) (彼が考えていたよりは早く) 一戦を交えるべくやって来た(inf), ④また(アリストクレスとヒッポノイダスの) 部隊が加勢しないので(ὥς 節), スキリタイ人部隊に本体に合流せよと命令を発したが(ga), ⑥スキリタイ人部隊もすでに隙間を元のように埋めることはできなかった。

72. 2.: そしてスパルタ軍は, [戦闘経験から来る 戦術の巧みさの点ではこの当時万事につけて甚だ見劣りがしたが(pc)], 勇敢さにかけては, 相手に劣らずすぐれているという実を示した。

これは簡単な H₁ の文。何も言うことはない。

72. 3.: というのはつまり(γάρ), ①戦いが白兵戦になった時(ἐπειδὴ), ②「マンティネア軍の右翼が, スキリタイ人部隊と旧ブランドス部隊から成る戦列を蹴散らし,」そして(xaz) ③「マンティネア軍とその同盟軍, およびアルゴス軍の精鋭一千は」[④スパルタ側の戦列の間隔が開いたまま詰められていなかった部分に突っ込むや(pc)], 「③多くのスパルタ兵を倒し, 陣内を駆けめぐって攻め立て, (後方の) 輜重車にまで達し, そこに配置されていた若干の年輩の兵を殺した。」

以上57語, この程度の語数だと何の無理も感じずにすなおに読める。ところが次の72. 4. のはじめの短文を見ると, 「このようにしてスパルタ軍は(μέν) 敗れた」と書いてあって, これは今の72. 3. のまとめであり, 前文, すなわち72. 2. の前半, すなわち分詞構文で言っていたことの実例である。さてこそ72. 4. の後の長文の冒頭にはὁὲが来て, μένと対照し, これは72. 2. の主節で言っていることの実例である。とすれば, トクキュディデスならば, 72. 2. から4. まで, まとめて一つの文にしかねないところなのに(その場合72. 4. のはじめの6語の文は不要になるだろうからこれを省くと, 全体で134語の文になる), それをそうしないで, 彼がこのようなまとめ方をしたことの方に, ここでは注目しておきたいと思う。そこで72. 4. である—

①しかし戦列の他の部分, とくに中央部では, ②「そこにはアギス王と, 彼を囲んで三百の「騎士」と呼ばれる面々がいた(rel) ③アルゴスの老年兵や「五隊」と呼ばれる部隊, それに(カルキディケは) クレオナイヤ(アルゴリスの) オルネイアイから来援した部隊, ④および彼らと並んで戦列についておった(p) アテナイの部隊に襲いかかって(pc), ⑤「これを敗走せしめた」が, ⑥彼らのほとんどは, 待ち受けて迎え撃つでなく(p), スパルタ軍が接近するや(ὥς 節, temp) ⑦たちまち降参し(p), ⑧中には, 追いつめられて敵の手中に陥ることなきようにと(inf) ⑩(押し合いへし合いしているうちに) 互いの足下に踏みにじられた者たち(rel) もある。

この最後の⑨⑩あたりのテキストのギリシア語は少々異様で、こういう読み方でよいのかどうか分からない。しかし全体は 72. 1. に似ていて、恐らく普通なら新しい文を起すところであろう⑥を、⑤の主節の目的語（それは③の分詞構文の目的語と同じなので省略されている）を修飾するはずの分詞、という形で後につないだ（⑥の「待ち受ける」、⑧の「降参する」）。語法としてはやはり普通のものだが、許されるからといってこういうつなぎ方をされると、多少の違和感は避けられないであろう。なにしろここを最も愚直に「訳す」と、「ほとんどが待ち受けて迎え撃ちもせず、たちまち降参した者らを敗走せしめた」となるのだから。

7

トゥキュディデスはどのような場合、なぜ、いかにして、長文を書いたのか、これまで見てきたことを簡単にまとめてみるとこうなるだろう。

1. トゥキュディデスの文の書き方には原則があって、彼が事件や行為の一つの単位であると解したことは一つの文章で書く。従って、その単位が小さければ文は短くなるし、単位が大きければ文は長くなる。それゆえ、彼の文の区切り方を見ると、彼が事件なり行為なりの組み立てをどう考えていたのかも見えてくる。
2. しかし、そのように記述すべき対象の大小とは別に、トゥキュディデスが、事件なり行為なりの前後関係、動機・理由などというようなものを知り得たと信じた場合は、その前後関係なり動機・理由なりを、やはり一つの文章の中に組み込む。そして彼の文章が長くなるのは、これによる場合が最も多い。
3. 上に挙げたような理由で文が長くなるからには、文の構造は複文に(H₁, H₂, H₃)にならざるを得ない（このために最もよく利用されるのは分詞構文、関係節）。しかし、60語、70語もの文を単一のペリオドにまとめるには、かなり言葉に無理を強いなければならず、いきおい、二つ（場合によっては三つ）のペリオドを等位接続詞等によって paratactic に結合するという方法が用いられることになり、100語を越える文などはほとんどすべてがこの方法によって書かれている（上に見た限りでの例外は I 132. 5. と V 16. 1.）。つまり、文の一つ一つの要素は hypotactic でありながら、それを一つの文にまとめる時には paratactic になるということ

が起きているわけで、これは、トウキュディデスが何が何でも事件や行為の一つの単位は一つの文で、と努力したことに基づくのか、それともトウキュディデスの思考法のもっと根本的なことにかかわるのか、それは上に考察したところからだけでは分からない。次の「付録」を参照して頂きたい。

付 録

長い文についていろいろ見てきたが、短い文についても一言触れておきたい。とくに短い文が多数並んでいる箇所での短い文の有様を見ておきたい。そういう箇所といえばやはり事実の記述に徹した所ということになり、それなれば典型的な箇所として、また第二巻の疫病と記録や第三巻のケルキュラの内乱の記述が思い浮かぶ。

第二巻 疫病の記述 (Ⅱ 49-54) の各文の語数と構成：

| | | | | |
|--------|--------|-----------------------------------|--------|--|
| 【§ 49】 | 1: 18語 | H ₁ | 1: 10語 | H ₁ |
| | 2: 41語 | H ₁ +P | 3: 21語 | P |
| | 3: 24語 | H ₁ +H ₁ +O | 4: 19語 | H ₂ |
| | 5: 20語 | P | 5: 30語 | H ₂ |
| | 5: 14語 | H ₂ | 5: 11語 | O |
| | 6: 12語 | O | 6: 60語 | H ₁ +H ₂ +H ₁ |
| | 7: 28語 | H ₁ +H ₁ | 8: 21語 | P |
| | 8: 18語 | P | | |
| 【§ 50】 | 1: 30語 | H ₁ +H ₂ | 1: 17語 | H ₁ |
| | 2: 2語 | O | 2: 15語 | P |
| | 2: 11語 | H ₂ | | |
| 【§ 51】 | 1: 24語 | H ₁ | 1: 10語 | O |
| | 1: 7語 | H ₁ | 2: 10語 | P |
| | 2: 12語 | H ₂ | 3: 7語 | O |
| | 3: 20語 | H ₁ +H ₂ | 4: 40語 | H ₂ +H ₁ |
| | 4: 6語 | O | 5: 16語 | P |
| | 5: 9語 | P | 5: 25語 | H ₂ +H ₁ |
| | 6: 24語 | H ₂ | 6: 9語 | H ₁ |
| | 6: 28語 | P+H ₂ | | |
| 【§ 52】 | 1: 22語 | H ₂ | 2: 37語 | H ₁ +P |
| | 3: 11語 | H ₃ | 3: 18語 | H ₁ |
| | 4: 15語 | H ₂ +H ₂ | 4: 15語 | H ₂ |
| | 4: 25語 | H ₁ +H ₁ | | |
| 【§ 53】 | 1: 13語 | O | 1: 30語 | H ₂ |
| | 2: 19語 | H ₂ | 3: 18語 | H ₂ |
| | 3: 16語 | H ₁ | 4: 55語 | H ₂ +H ₂ |
| 【§ 54】 | 1: 15語 | H ₂ | 2: 23語 | H ₁ |

| | |
|-----------------------|--|
| 3: 25語 P | 3: 9語 H ₁ |
| 3: 20語 H ₁ | 4: 27語 H ₂ +H ₂ |
| 5: 10語 O | 5: 31語 H ₁ +H ₂ +O |
| 5: 7語 O | |

文型に関して以上を集計すると次のようになる：

O=9 (15.8%), P=9 (15.8%), H₁=11 (19.3%)

H₂=12 (21.1%), H₂=1 (1.7%), +つき=15 (26.3%)

「+つき」とは、例えば H₁+P や H₂+H₂ のようなものことで、先ほど述べたような、一つ一つの文の要素は hypotactic だが、全体は paratactic だという場合を指している。

第三巻ケルキュラ内乱の記述 (Ⅲ 70-84) の文の語数と文型：

| | |
|--|---------------------------------------|
| 【§70】 1: 32語 H ₂ | 1: 12語 H ₂ |
| 2: 27語 H ₁ | 3: 24語 H ₂ |
| 4: 21語 H ₂ | 4: 7語 O |
| 5: 27語 H ₁ | 6: 51語 H ₂ +H ₁ |
| 6: 16語 O | |
| 【§71】 1: 33語 H ₂ | 1: 8語 H ₁ |
| 2: 28語 H ₂ | |
| 【§72】 1: 16語 H ₁ | 2: 21語 H ₁ +H ₁ |
| 3: 24語 H ₁ +P | 3: 21語 H ₂ |
| 【§73】 a: 19語 H ₂ | b: 18語 P |
| 【§74】 1: 16語 H ₁ +H ₂ | 1: 18語 H ₂ |
| 2: 62語 H ₂ | 3: 14語 H ₁ |
| 3: 18語 P | |
| 【§75】 1: 19語 O | 1: 34語 H ₂ |
| 2: 7語 H ₁ | 2: 30語 H ₂ |
| 3: 12語 P | 3: 14語 H ₁ |
| 4: 7語 O | 4: 40語 H ₁ +H ₂ |
| 5: 16語 P | 5: 25語 H ₂ +P |
| 【§76】 a: 36語 H ₁ | b: 12語 P |
| c: 12語 H ₁ | |
| 【§77】 1: 40語 H ₁ +H ₂ | 2: 27語 H ₁ +P |
| 3: 29語 H ₁ +H ₂ | |
| 【§78】 1: 14語 H ₁ | 1: 27語 H ₁ +H ₁ |
| 1: 10語 H ₁ | 2: 25語 H ₁ +H ₁ |
| 3: 24語 H ₂ +H ₂ | |
| 4: 49語 (§79. 1. まで) H ₁ +H ₁ +O | |
| 【§79】 2: 26語 H ₂ +H ₂ | 3: 27語 H ₂ |
| 3: 10語 H ₁ | |
| 【§80】 1: 34語 H ₂ +O | 1: 7語 H ₁ |
| 2: 21語 H ₂ | 2: 21語 H ₁ |
| 【§81】 1: 15語 O | 1: 12語 H ₁ |
| 2: 43語 H ₁ +H ₁ | 2: 26語 H ₁ +O |

| | | | |
|--------|--------------------------|--|------------------|
| | 3: 30語 H_1+P | | 4: 41語 H_3+P |
| | 5: 18語 $O+H_1$ | | 5: 25語 P |
| 【§ 82】 | 1: 39語 $O+H_2$ | | 1: 36語 H_1 |
| | 2: 37語 H_2 | | 2: 24語 H_2 |
| | 2: 20語 H_1+O | | 3: 28語 $O+H_2$ |
| | 4: 12語 O | | 4: 26語 P |
| | 4: 14語 H_1 | | 5: 11語 P |
| | 5: 9語 P | | 5: 14語 H_1 |
| | 6: 15語 H_2 | | 6: 15語 P |
| | 6: 17語 H_2 | | 7: 14語 H_2 |
| | 7: 10語 O | | 7: 20語 H_3 |
| | 7: 32語 H_1+P | | 7: 19語 H_1+P |
| | 8: 11語 O | | 8: 10語 O |
| | 8: 75語 $H_1+H_1+H_2+H_1$ | | 8: 15語 $O+H_1$ |
| | 8: 16語 H_1 | | |
| 【§ 83】 | 1: 30語 $O+H_1+O$ | | 2: 28語 $O+H_1$ |
| | 3: 8語 O | | 3: 30語 H_1 |
| | 4: 17語 H_1 | | |
| 【§ 84】 | 省略 | | |
| 【§ 85】 | 1: 23語 P | | 2: 24語 $O+H_1+O$ |
| | 3: 10語 O | | 3: 49語 H_1+H_1 |

文型に関してまとめると次のようになる。

$O=12$ (12.8%), $P=12$ (12.8%), $H_1=18$ (20.6%)

$H_2=17$ (18.1%)… $H_3=3$ (3.2%), $+=32$ (34.0%)

ただし、以上のうちⅡ 83-84. (上の表では前後を線で挟んである) は、内乱の記述というよりは、内乱がつづく人間がどこまで駄目になるかというトッキュディデスの感慨を述べる条だから、というのでこれを省く(全部で31個の文)と、上の表は次のようになる。

$O=7$ (11.1%), $P=6$ (9.5%), $H_1=13$ (20.6%)

$H_2=12$ (19.0%), $H_3=2$ (3.2%), $+=23$ (36.5%)

これを先ほどの第二巻の疫病の記述の場合と比べると、 O や P にも数値の上の差があるが、それについてはこれだけでは何も言えないだろう。しかし(両方に共通して H の数値がほぼ等しいのも確かながら、それよりは)、両方の箇所にも共通して目立っているのは、文のほぼ三分の一が+で占められていて、他のすべての文型を断然引き離して多いということである。すると、「+つき」を一括して扱うのなら、それと比較すべきは H_1 , H_2 , H_3 ではなく、それらを一括した H というものだろうと言われるかもしれない。しかしそれなら、「+つき」にも P を加えなければならない。なぜなら P も+には違いないからで、ただ $O+O$ ($+O$ …) の場合に限り、 P という記号を与えたのだからである。ちなみに、「疫病」の方では $H=24$ 語、 $++P=24$ 語(共に42.1語)であり、「内乱」では $H=27$ 語(42.9%), $++P=29$ 語(46.0%)である。ということは、トッキュディデスはこれらの2箇所において、 H_1 にせよ H_2 にせよ H_3 にせよ、とにかくペリオドス1個から成る文(H)と、ペリオドス+単文、あるいはペリオドス+重文、あるいはペ

リオドス+ベリオドス（以上が「+つき」）、あるいは単純な重文（P）の総計をほぼ同程度（40%以上）使っているということである。

はじめの問いに戻って、「+つき」の文に的をしぼるならば、上の2箇所の観察から察するに、トゥキュディデスは短い文においてすら、恐らくつねに30%前後、「+つき」の文を用いている、と言えるであろう。つまり彼は、70語とか100語以上とかいう文を書く時にのみ「+つき」を用いたわけではなく、もっと短い文（ちなみに「疫病」の文は15個、476語、平均19.3語であり、「内乱」の文は23個、734語、平均23.2語であって、トゥキュディデスの全文体の平均25.3語を思い出すならば、「疫病」の方はかなり短く、「内乱」の方はやや短い、と言えるであろう）においてすら、用いているということである。ここまで数字を挙げてきたのだから、ついでにもう一つ数字を挙げておくと、この2箇所の「+つき」の文の平均語数は、「疫病」では31.7語（15文、476語）、「内乱」では31.9語（23文、734語）である。

これまでの考察によって、トゥキュディデスが二つの単文なりベリオドスなりを二つにせず、Pあるいは「+つき」の形で一つにした事情は知り得たと思うが、それならば、そのトゥキュディデスの文の書き方に即するなら当然一つにまとめられて然るべき文が、二つないしは四つの独立した文のまま放置されている所はないのか、と言うと、これは半ば予想されるところでもあるが、ある。今見た「疫病」「内乱」の2箇所にも、少なくともそれぞれ5、6箇所ある。それを列挙すると、

「疫病」Ⅱ 49. 1. の2個の文（それぞれ18、10語の文）、49. 5. の4個の文（20、30、14、11語）、51. 4. の2個の文（40、6語）、51. 5. のはじめの2個の文（16、9語）、53. 2. と3の2個、計3個の文（19、18、16語）。

「内乱」Ⅲ 70. 4. の2個の文（21、7語）、70. 6. の2個の文（51、16語）、73の2個の文（19、18）、75. 3. の2番目の文と4のはじめの文（14、7語）、80. 2. の2個の文（21、21語）、81. 1. の2個の文（15、12語）

がそれである。ほかにもまだ、その気になれば一つにまとめられそうな文はあるが、少なくともこれらの箇所はつないで一つにしてもおかしくない。トゥキュディデスはほかの所では一所懸命Pや「+つき」の文を書いているのに、意識的にかどうかは分からないが、このように放置している所もあるということである。

しかしここに困った問題があって、それは句読点に関わる。私はH. S. Jones校訂のOCT版に拠って本論を書いており、句読点も当然OCT版（つまりはJonesの意見）によって文の語数をかぞえている。もとより句読点はトゥキュディデスのあずかり知らぬところ、むしろ句読点が発明された後の写本筆者の手になるものであり、従って、私がこれまで文が長い短いのとあげつらったのも、極端な言い方をすれば、トゥキュディデスではなく写本筆者が写した文の長さについてでしかないことになる。それでもOやH（とくに後者）に関しては、それこそ完結文だから、写本筆者を越えて、トゥキュディデスがどこで文を切ったかは、今でも知ることができる。ところがPや「+つき」となると、書く者がその気になればどこまでも続けられる、あるいは逆にどこでも切れる文だから、トゥキュディデスが本当はどこで文を切っていたのかは分からないと言える。ただし、写本とまで言わなくても、現在刊行されている印刷された校本でも、一致している箇所の方が一致していない箇所よりはるかに多いことは事実なので、私はそれを振りか、OCTによって、終始符、セミコロンが打ってある箇所はすべて文の切れ目であると認めて、上乗の考察を行ってきたのである。しかし、写本間に何の異同も

なくても、現在の刊本で句読点の異同があることも時々あって、今われわれが見ている箇所に関して言えば、II 49. 4. にそれがある。OCT (Classen-Steup の Weidmann 版も同じ) では 49. 3. の終わりに終始符があって、49. 4. で新しい文が始まっている。これに対して J. de Romilly 校訂の Budé 版 (C. F. Smith の Loeb 版も同じ) では、この終始符がコンマになっていて、従って 49. 3. の後半の文がそのまま 49. 4. の終わりまで一つながりの文になっている。そこで、Jones や Classen-Steup によれば、ここには 24 語の H_1+H_2+O と、19 語の H_2 という二つの文があることになるが、Romilly 女史や Smith によれば 43 語の $H_1+H_2+O+H_2$ という、4 個のペリオドスが並列している (はじめの 3 文は *kal* で結ばれ、最後のもの、つまり 49. 4. は *τε* でつながる) 1 個の文になる。

8

私の文もそろそろけりをつけないと、後から後から従属節がつづくトッキュディデスの H_2 の文のようになって、読者からいやがられることになる。上に見たことから何が言えるかは前節で簡単にまとめたので、ここではその補足を行うことになる。

「付録」から明らかのように、トッキュディデスが「+つき」の文、つまり 2 個以上のペリオドスを paratactic に並列させた文を用いるのは、彼の文体上の癖の一つであって、単に文を長くさせる手段ではない。もちろんこういう書き方をすれば、文は長めになることは当然で、その証拠に、一つの文の平均語数が 19.3 語しかない「疫病」の記述でも、「+つき」の文の平均語数は 31.7 語に上り (とはいっても、これは普通の文の長さの範囲に入る)、「内乱」の方は平均 23.2 語の中にあつて、「+つき」は 31.9 語であつた。つまり、ごく普通の長さの文を書くにも「+つき」の文を多く用いているのであつて、100 語以上の文に「+つき」がほとんどつねに用いられているのは、その文を構成している個々のペリオドスがかなり大規模になっている時でも、平然と重文形式を用いた、あるいは用いなければ不足だとトッキュディデスが思った結果だと考えるべきなのである。複雑な背景や当人の思惑を書かねばならぬ (とトッキュディデスが考えた) 行為や事件は、当然、個々のペリオドスも複雑で大きくなる。また、行為でも現象でも、目に見えているだけ、裏も背景も考えなくてもよい、簡単だと思える場合でも、それを言葉で正確に伝えるとなると、重文を必要とするのが多かつた、ということでもある。

付録の最後で注意した校訂者による句読点の異同の問題は、事長文に関してはさしたる問題にはならない。長文においては異同の生じようがほとんどない

からである。問題はつねにたくさん短い文が並んでいる場合、このうちの2ないし3はつなげて1個の文にする方がよいのではないか、という疑問の形をとる。そしてその判断の基準となるものは、それぞれの文が一つのことを述べているか、あるいは一つのことを二つ以上の文が分担して述べているか、という考慮である。文の整合性とか均衡とかいうものはほとんど考慮に入れなくてよい、というか、この場合の判断の基準にはなり得ない。トゥキュディデスという人はそういうものには無関心だったか、意識的に無視したか、とにかく彼の文章は整合性や均衡に乏しいからである。その点では彼は悪文家と呼ばれても仕方なく、それ自身考察に値する問題である。